

山と博物館

第9巻 第8号 1964年8月25日 大町山岳博物館



夏山と水

東京都の水不足は有名である。そして今年の夏山——特に白馬——針ノ木間の後立山の水不足もこれに優るとも劣らないものがあつた。

一リットル50円で水を売る山小屋、10円硬貨を入れるとコップ一杯強の水が出る機械を備えた山小屋、しかし一リットル10円でも水を売ってくれる所は良い方で、天水(雨水)にたよっているある小屋など、反対に一リットル五〇〇円で買い上げるといふ嘘のような話。山小屋も大変だが、登山者も又大変である。ポリタンの水をニランでは歩き、登山者同志が会えば水の話である。

近くに雪が残っていると聞けば、少し位汚れていてもかまわずつめ込み、果はキャンプ組から赤痢が発生する仕末。山の上で伝染病が発生したのではたまらない。

全国各地から集まってきた登山者が、水欲しさから、それらの残雪を使つたらと思ふと背筋に寒いものが走る。

登山者の数は年々増すばかり、それにともない山小屋の増、改築は進む、水場の近くにあるところはポンプアップなどしているが、天水にたよっている山小屋は、今年のように好天が半月も続けばお手上げの状態である。雨が降らなけりや仕方がない々と東京都並の事といつてしまえばそれまでだが、なにか良い知恵はないものだろうか？

(千葉 彬司)

科学 と 観光

阿 部 西 与

編集者から与えられた標題は「科学と観光」であった。しかし、私には観光という一つの産業分野に対する経験はあっても、「科学」としての学問体系の中で、勉強をしたわけではない。だから、この小文も「観光がより科学的な立場から、近代産業の仲間入りをするには、いかに努力すべきか—それも大糸線沿線の北アルプスと、その山麓を中心としての範囲で」という程度に読んでいただきたいと思う。

一、歴史と過程

この八月十六日に、北アルプス観光協会主催のもとに、木崎湖花火大会が開かれたとき私は、この地における観光の、草分け時代が思い出されて、感慨無量であった。

「観光」という新しい言葉が使われ出したのは、平和に戻った戦争直後からだと思われる。この語源が「易経」の「国之光を視る」に始まったことはともかくとして、私たちの設立運動が効をそうして大町観光協会が創設されたのが昭和二十三年、大北郡市を一丸とした北アルプス観光協会もその直後に発足した。これらの運動と関連して、山岳博物館も根強い運動の末、昭和二十六年に開館した。

あれから十五年に及ぶこの地方の観光事業史の中で、百瀬慎太郎さんや、桜井順さんたちは、故人となられたが、こんにちの隆盛の基礎を築かれた、相模三蔵、古川潔、内山慎三等の各氏はそれぞれ健在で、第一線で活躍しておられる。

私はこの十五年の過程の中に、「歴史」をつくり出していく「人間」の本質を感じるの

である。戦前から大衆運動に身を置いた私が戦後、この地につくり出した「組織」はたくさんある。しかし、社会の進展と、大衆の求める方向に従って、こんにちまで永続しているものは、これら観光協会と、博物館、地区評(地区労)だけである。

私は、最近「弁証法」という言葉をむかしのように、機械的に使うことを好まない。なぜなら社会科学の運動と歴史の中で、もっともたいせつなのは、「信じ合える人間」であって、「弁証法」は単なる方式にすぎないことに気づいたからである。

二、観光事業の社会性と経済性

観光時事は、新しい産業であるが故に、その産業としての基礎構造が定まっておらないのが現状である。換言すればいちおう、第三次産業に分類されているものの、特に産業開発の後進性の多い北アルプス地方では、一、二次産業と関連する総合性が必要とされるのである。

たとえば、農村の経営危機を民宿経営により打開したことや、土産品製造業の中に新しい技術と労力を吸収しているものこの例である。

この地方においては、豊富な未開の資源が多く、加えて最近のレジャーブームは、その観光投資欲を刺激して、産業構造の移動とともに、土着の大資本の進出を強めていった。

東急の白馬進出に続く、北海道炭鉱の鹿島槍高原、そして太平洋観光の大町温泉郷建設等がこの例である。これらの経営者の特色は

つねに「地元との融和をはかる」という一貫した態度である。それは、およそ経営学の範ちゅうに入る資本、金融、労働力等のすべての分野において、協調的であることが、この地方の経済的な発展に大きく貢献していることを認めなければならない。このことは創設当初に多少のトラブルはあったにせよ、大資本の進出に対する地元民の危ぐを取り去り、これらの大資本が進出しなければ、こんにちの北アルプスの発展は望み得なかつたという実証にもなるわけである。

しかし、クロヨンブームを全国に起こした関西電力の場合は、すこし次元が違うようである。八月一日からトローリーバスが動き出し電力会社がこれを直営して、観光事業と関係を持ったという現実までに、富山県との問題を含めて、あまりにも超政治的な問題が多すぎるのである。企業が本来、このような大きな政治的問題に左右されることは、健全な姿とはいえないといえるだろう。しかし、政経が混同されるところに近代産業の複雑性があることも認めなければならぬ。この意味ではその社運をかけて、クロヨンを日本人の手でりっぱに完成させた、関西電力という会社そのものも被害者だといえよう。たゞいま問題になっている懸案事項については、やはり県や市という地方公共団体が、主体性を持って解決するのが、適切な方法だといえよう。

国鉄の統計によれば、北アルプス北部を訪れる登山客数の指数は、昭和三十三年を一〇〇とすれば、昭和三十八年は、二一七と驚異の上昇を示している。このことは、結果的にいえば喜ぶべきことだが、半面、いわゆる成長のかけにある、ヒズミについても、考えて見なければならぬのである。

たとえば、大糸線の輸送力のアンバランス

や、土地問題などに見られる私権と公共性の調整、受け入れ施設やサービス面の不完全さそして最近、特に目立つようになった接客職員の求人難等、日本経済が直面する課題が、この山麓にまで波及してきているのである。

また、特に私が力説しているのは、この地方の観光事業経営にたいせつなことは、「近代的な科学性」の導入ということであった。前に述べた、大きな資本を持つ企業は、システムそのものが、確立しているからともかくとして、特に地元資本による企業経営においては、昔ながらのカン、経験と過剰意識だけに頼る非科学性、ドンブリ勘定のな会計処理、そしてまた、前近代的な労務管理、背のびすぎた、ロスが多い投資等、数えればきりがないのである。

マーケティング(Marketing)の三原則は①市場の調査。②商品計画③販売促進にあるといわれる。たしかに、いまのこの地方に必要なのは、近代経営の一分野を占める、これら三原則の科学的処理にあるといえる。

私たちは、その努力の中にこそ、まだ科学的立場から体系的に確立されておらない「観光経営学」の因子を探し出したいと思うのである。

三、自然科学の立場から

資本と企業は、自然の保護については、きわめて無情である。黒部、白馬、樽池を中心とする北アルプスの美しい自然は、文明の横暴に抵抗する、最後の秘境ともいえる。

大町山岳博物館を創設した目的はここにあった。この博物館こそ、少なくとも北アルプスにおける、自然科学のアカデミーの殿堂であるばかりでなく、人間と、その社会と、自然を融合させる科学の府でもなければならぬのである。(信濃大町駅助役)

雷鳥現地保護 種池小屋日記



H・T・Y・Iの4人はさっそく雷鳥保護舎の組立にとりかかり、残りのT・I 2人でメスの観察。

7月11日 3時

起床、中南間峯、北峯まで巣さがし13時、交替の第二班が新鮮な野菜を背に登ってきた。まったくうれしい

7月15日 昨日保護舎に収容した雷鳥親子を見に行く、一部を修理、ヒナ、親共いく分興奮しているよう

途甲まで迎えに行く、総員10名でにぎやかに夕食のカレーライスをたべて、仕事の引継をする。

7月16日 7時

30分、針ノ木コース班出発、禽舎のライチョウの終日観察に入る。観察中朝と夕に大群で押しよせるブユに皆閉口する。

夕飯の味噌汁を何度もあたためなおしても誰も帰って来ない、ネヤにつくのが遅れているんだらうか？下の谷間の灯が美しい。

7月18日 激しい雨と風、悪天候にグチを

こぼしながら食事、一日中空をみあげてグチをこぼす「東京にでも分けてやりたいよ」
7月22日 2時40分、禽舎見まわり異状なし、中南間峯白沢斜面でリングつけ、足場が悪いので苦労する。汗が滝のように流れる。
M・Tの両名はコバイケイソウの葉にたまったツユをうまそうに飲む。ヒナは相当飛翔力があるので簡単に逃げられてしまい、まったく残念。
7月24日 11時40分、南峰白沢天狗上空にイヌワシ出現、2時45分、扇沢から白沢天狗へイヌワシ、3時40分、イヌワシ、中南間峯上空、まったく今日は良く出現する。
7月27日 起床4時30分、保護舎パトロール、6時10分、朝食同45分、鹿島槍ヶ岳、A M、Tの4名出発、16時30分鹿島槍調査の4名帰る。22時、気象終日観測の器具設置はじめる、23時、気象終日観測開始
7月28日 4時45分、気象終日観測メンバー交替、23時気象終日終了、23時10分就寝。
7月29日 5時30分、禽舎パトロール、6時、北峯までパトロール(断片観察)
15時保護舎の移動をはじめ。7月15日設置してより第5回目、17時40分移動完了、明日まで3時間おきに禽舎の見まわり。
7月30日 5時15分禽舎パトロール、異状なし、7時15分、第五班は交替の針ノ木岳へ向う、11時、第六班の4名到着、休む間もなく14時禽舎内の終日観察に入る。7月16日より一滴も雨が降らないので、種池の水も底をつく、鹿島槍で赤痢が発生、飲料水には特に気をつけよう。
8月1日 起床2時20分、本日はヒナにリングつけに行く、昨夜失敗したので慎重にやる、5時15分、雌親、ヒナ4羽に足輪をつけ、NHKの取材に協力、10時15分やっと朝食にありつく、11時55分、鹿島槍まで出発、19時ネヤつき観察、小屋到着20時15分。
8月2日 飲料水が底をついてきたので沢まで水運び、40リは軽く入る缶を背負子につけて急坂を登る、たっぷり2時間はかかる、一回行ってくるとグツタリする。13時40分、禽舎移動、15時30分作業終了、23時、禽舎パトロール、異状なし。
8月3日 3時30分、ネヤ立ち観察の為、中峰へ出発、9時10分、水汲みに出発、18時H3まで出発、21時20分、夕食。
8月5日 昨日交替した第七班は終日観察に入る、12時、昼食後水が一滴もなくなる、神様雨が降りますように二人で水汲み、Nはものすごい馬力で缶に一杯の水を一時間で背負ってきた。ここ種池での話題は水々々水々である。登山者の群も水々々水々々合えば話は水のこと。
8月6日 9時禽舎の移動、13時植生調査に出発するも途中で雨に合う、Hはコップ、コッヘルあらゆるものを集め雨だれの下にズラリ、人間生きかえる々々々々々の雨々々々々、明日は水くみに行かなくても良い。
8月9日 11時、館長猛雨の中を到着、15時禽舎のライチョウ放鳥、収容した時と比べて大きくなったことよ、私たちが近くに居ても一向に逃げようとしなない、私たちにすっかり馴れてしまった。禽舎を解体してヘリコプターで運ぶ、時に17時30分、いよ／＼あすは下山だ、ライチョウさんいづまでも元気でね——7月5日から8月10日までの37日間のライチョウの現地保護には信州大学教育学部生態研の学生、本館職員、調査員など延べ二五〇人が動員された。又種池小屋、冷池小屋の方々にも大変便且を計っていたのだ。紙上より感謝いたします。——

7月5日 現地増殖の第一班は6時10分山博をジープで出発、扇沢をつめ11時40分、種池小屋に到着、汗が顔から吹きでる。
7月6日 食糧、禽舎用アングル、器械を積んだヘリコプター到着。
7月10日 7日から降りつづいた雨が午前中も残る。午後久しぶりに太陽の輝きをみる

村をまわって農家の歴史をたずね歩くと、年配の人たちはよく古い家のことを「あそこは慶安の竿請だ」ということを使って説明してくれることがある。「慶安」は今を去る三〇〇年余の昔、すなわち江戸時代の早い頃の一年号であり、「竿請」は大名がその領国経営の経済的基盤を確立するに必要な年貢米を徴取するために、田畑の面積・作物の作柄すなわち田畑の等級・耕作責任者すなわち納税義務者等を田畑一枚ごとにしらべる「検地」のことである。だから「慶安の竿請だ」といえば、その家は三〇〇年前にはすでにその土地に住みついでいて、一人前の農民として公儀に認められ生活していた古い家であるという意味で、家歴の古いことを誇りともしている用語である。ところが最近ではこのようなことばあまり聞かれなくなり、間もなく消滅してしまうのではないかと思われるので、ここで「慶安の竿請」すなわち「慶安年間におこなわれた検地」について目をむけて見たいと思う。

慶安の竿請 (一)

巾 具 義

水野氏は、どの大名もがそうであるように水野忠職の代の慶安二年(一六四九年)から同五年にかけて松本領内の検地を実施したただ、それまでの大名と異なる点がある。以前の大名は検地をしたといっても実際に藩の役人が村々へ出張して検地するというのでなく、費用や手間、さらに実際の検地によっておこる領民の反感などを考えて、単に自主的に村々からその村内の田畑状況を報告させる形式のいわゆる帳面上の検地である差し出し検地という方法がほとんどで、大町市平区偕馬や常盤区一本木でおこなわれた慶長一九年(一六一四年)の小笠原氏の検地、また大町市常盤区一本木でおこなわれた寛永一五年(一六三八)の堀田氏の検地がその例である。ところがこの方法だと農民は利益を考えて隠し田畑といって報告しない、あるいは作柄面積を減らして報告するようなことがおこり、藩財政にプラスにならないことが多くなるのは当然である。そこで水野氏は一か村に数人あての検地役人を出張させ領内のあらゆる山村僻地にまでもわけ入って、文字通り潛力を結集しての実検地を開始したのである。この慶安検地は、それ以後江戸時代を通じて藩財政の基盤となる重要な意義をもつものである。さてこのとき田畑の面積をしらべるには、その四隅に細見竹を立てて目標とし、さらにその中間に梵天竹を立てて水縄を張り、その間を間竿をもって測量するというように竿を多く使用して検地を請けるところから、先きの「竿請」なる語が生まれ、また後述するが「水縄」を用いるところから年貢の割り付けを示した書類を「水帳」ともよぶようになるのである。(未完) (松川小学校教諭)

ヒクイナのヒナ

長沢修介

夕涼みをかねて田圃のあぜを歩いてみると、夏の暑さを忘れさせる涼さで気持ちがよい。めっきり多くなった虫の音に耳を傾けて歩いてみると真黒いヒクイナのヒナに出合った。卵からかえって二三日たろうか。歩くのもよちよち、全身が真黒なうぶ毛に包まれ黒く光った腫をパツチリ開いてとても愛らしい。手の上にのせてみると体の割合に大きな足が目立つ。孵化してすぐに巣を捨るので足だけは丈夫なのだ。試に草の茂の中へそっと置いてみると、体重が軽いので草の中へは沈まず、うぶ毛の翼で器用に草を分け、草の上ののっかってこの小さいヒナがと疑うほどの早さで歩く。翼はさしすめ人間の手と言った所か。猿が枝から枝へと渡り歩く様と似て小鳥のヒナとは思えず、本能とは言え警異であった。



博物館 ニューズ

コブ白鳥 羽どめ

三十七年三月皇居から興入した、コブ白鳥のつがいは、ことしの五月、三羽の雛を孵化させ元気に生育していたが、体重も六割と増え風切羽も伸びてきたので、盆の終った十八日羽どめを行なった。ちょっと可愛そうだったが上手にできて、池をすいすい泳ぎ廻っている。

入館者増加

この八月に入って、山博の入館者が急激に増加した。八月一日から二十六日までに入館者は六〇一五人、観覧料収入は八三、七三五円で昨年同期の倍増、八月末日には十万円を突破する見込なので、昭和三十六年頃までの年間観覧料収入実績をこの八月の一月だけで超えることになりそうだ。

ライチョウの雛放養

カモシカ園内に四坪ほどの金網張りの囲をし、七月孵化したライチョウを放養、広い遊び場を与えられて、ライチョウもすっかり元気に飛び廻っている。

表紙説明

鹿島槍 (カクネ里)

画 斎藤 清

山と博物館 第九巻 第八号

一九六四年八月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)二二一

大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町

信州印刷大町工場